

原著論文

軽度知的障害者へのグループホームにおける 余暇支援の在り方

今井 優香[†]

Study on Support during Leisure Time in Grouphome for Persons with Mild Intellectual Limitations

Yuka IMAI

キーワード：余暇支援, 軽度知的障害者

問題と目的

近年, ノーマライゼーションという考え方が浸透し, 他方で生涯学習の理念が普及する中で, 生活や就労と並んで, 障害者が地域で余暇や文化を生涯にわたって享受できるようになることが求められてきている (小林 1995)¹⁾。2006年12月に国連総会にて採択, 2008年5月に発効された障害者権利条約の第30条においても, 「文化的な生活, レクリエーション, 余暇およびスポーツへの参加」が定められている。このように, 余暇自体が労働を前提としない独立したもので, また自己実現につながる文化的な活動という積極的な捉え方がされるようになってきている。

しかしながら, 知的障害者の余暇の現状としては, ゲームやTVなどの受け身的な活動が多く, また, 一緒に過ごす仲間が少ないということが, 調査研究より明らかにされている (郷間ら 2007, 武蔵ら 2009)^{2), 3)}。重度の知的障害者は, 単独行動や意思表示の難しさなどから, 余暇へのガイドヘルプ利用が可能であるのに対

し, 軽度の知的障害者は, 単独行動ができるため, ガイドヘルプなどの対象となりにくく, 支援の手が入っていないのが現状である。近年, 知的障害者の住まいの場としての広がりを見せるグループホームについても, 余暇支援を行えるほどの人的資源の余裕や制度はない。

筆者は, このような現状に対して, 軽度知的障害者への余暇支援を行う必要性があると考ええる。それは, 支援を行わなければ, それ以上の余暇の豊かさや, QOLを高めることに繋がりにくいと考ええるからである。

軽度知的障害者の余暇支援を行うにあたっては, 余暇についての先行研究で言われているような, 「自己決定」や「自己選択」を尊重することが大切であり, まずは1人ひとりの要求をとらえることが重要である。それに加え, 彼らが労働と余暇の関係性をどう捉えているのかということについても考えなければならない。それは, 労働と余暇の関係性の捉え方は, 国や個人によっても価値観が異なり, その価値観によって労働や余暇に対する充実度が異なるからである。ドイツでは「仕事のない人生こそ最高」と考えている人々が33%, 「レジャーが仕事に優先する」と考えている人が56%である⁴⁾。日本では, 一部の先駆的な余暇研究において, 理念的に積極的な余暇の捉え方がなされ

[†]障害児教育専攻 障害児教育専修
指導教員：白石恵理子

てはいるが、社会全体としてはまだまだ労働が中心と考えられている。しかし、「人間が生きていくうえで、働く側面と余暇の側面があり、これらをどのようにバランスよく調和させていくかということが大切な問題となってくる」ものであり、「充実した余暇は、あすの生活（仕事）の活動源となり、生きがいのある生活につながっていくと考えられるのである」（宮本ら1996）⁵⁾。

知的障害者において、渡邊（2000）⁶⁾は、「労働をとおした自己実現と余暇活動をとおした自己実現が最適な条件で止揚関係として認識される必要」があるとしている。しかし、わが国では障害者の労働参加が困難なため、「知的障害者への自己実現の支援には主体的な余暇支援が必要である」としている。

しかし、そもそも労働と余暇は必ずしも明確に分けることができるのかということも考えていかなければならない。また知的障害者が労働と余暇を関係性のあるものとして、どれだけ意識でき、それに基づいてどれだけ自己の労働や余暇を調整し得るのかということについても考えていかなければならない。そのような関係性を捉える力や、自己の労働や余暇を客観的に捉え、調整し得る力がどのくらいあるのかということを見るためにも、それを発達との関係で捉えることが必要だと考える。

そこで、労働と余暇の関係性の捉え方が、発達との関係でどのように変化していくものなのかということを中心に明かにしていき、その上で、余暇支援の在り方についての考察を加えたい。

方 法

1. 研究方法

本研究では、付き添いがなくても外出ができるため、社会との関係が密になり、また、「労働」と「余暇」をある程度区別して考えることのできる軽度の知的障害者を対象とすることとする。軽度知的障害者を対象としたのは、①「自己決定」における困難を抱えているにもかかわらず、それに対する支援がないこと、②単独行動ができる場合が多く、ガイドヘルプなどの支援制度の対象とならないこと、③「労働」

「余暇」をある程度区別して考えることができるため、それぞれの関係をどのように捉えているかをふまえて支援をする必要性があること等の理由からである。

「労働」「暮らし」「余暇」を区別して考え、それらを意識することができる軽度知的障害者に対し、それらの実態や意識を明らかにするために、聴き取り調査を行った。そして、筆者が現在知的障害者のグループホームで支援員をしていることから、そこで実際に関わった事柄についても結果として取り上げていくこととした。

さらに、軽度知的障害者の労働と余暇の捉え方を探るために、労働と余暇のたとえ話をし、それに対する感想を問うた。また、これらの発達の考察を行うために、調査対象者に発達検査を行った。

2. 対 象

聴き取り調査が成立する程度の話し言葉を獲得している知的障害者6名。なお、対象者の基礎情報を表1にまとめた。

表1 対象者の基礎情報

	年齢・性別	職 場
A	(59歳・男)	一般就労(染料製造会社)
B	(34歳・男)	作業所就労(就労移行支援型)
C	(30歳・男)	一般就労(スーパーの青果卸)
D	(23歳・女)	作業所就労(就労移行支援型)
E	(37歳・男)	作業所就労(知的障害者通所授産施設)
F	(43歳・男)	作業所就労(知的障害者通所授産施設)

3. 発達検査

新版K式発達検査2001に基づいた発達検査を行った。なお、Cについては、発達相談員が発達検査を行い、筆者は同席する形とした。その他の対象者については筆者が発達検査を行った。

調査期日は平成22年9月28日～平成22年11月3日である。

4. 聴き取り調査

「労働」「暮らし」「余暇」を区別して考え、それらを意識することができる軽度の知的障害者に対し、それらの実態や意識を明らかにするために、聴き取り調査を行った。

表2 聞き取り調査内容

基本属性	○年齢, 性別, 学歴
労働について	○職歴 (転職理由も)
	○仕事内容と仕事への思い 「今の仕事をしていて、嬉しいと思う時はどんな時ですか?」 「今の仕事をしていて、しんどいと思う時はどんな時ですか?」
	○仕事への要求 「今の仕事に対してもっとこんなことをしたいということはあるですか?」 「今の仕事以外にしたい仕事がありますか?」
	○給料の使い道/管理者 (自己管理以外は、形態についても)
余暇について	○仕事帰りに誰と何をしているのか/休日には誰と何をしているのか (一緒に過ごす人の性別についても)
	○余暇の過ごし方への満足度合い 「仕事帰りで一番楽しいのは何をしている時ですか?」 「休みの日で、一番楽しいのは何をしている時ですか?」
	○余暇の過ごし方への要求, ねがい 「仕事帰りや、休みの日に、今していること以外にしたいことはありますか?」

表3 労働と余暇の捉え方の話内容および質問内容

余暇<労働の話の内容	太郎さんは、朝早くに仕事場に行き、せっせと仕事をします。お昼頃になると、急いで昼ご飯を食べてすぐに仕事を始めます。休憩もせずに、夜遅くまで仕事をします。帰る途中で寄り道もせずに家に帰り、夜ご飯を食べ、お風呂に入ると、明日の仕事のためにもすぐに寝ます。このような生活を月曜日から金曜日まで続けます。 土日のお休みの日は、遊びにも行かずに、仕事のことをいつも考えています。
質問内容	① この話についての感想 ② 働きすぎて病気になるってしまったらどう思いますか
労働<余暇の話の内容	三郎さんは、朝仕事場に行き、仕事をしながら仲間と話をしたり、ゆっくりと休憩をしてお茶を飲んだりしています。お昼になると、仕事仲間とお話をしながらゆっくりと昼ごはんを食べます。たっぷり休憩して、またお昼から仕事をします。仕事でも、仲間と話をしたり、休みの日に何をして遊ぶかいつも考えています。3時頃になると、おやつを食べて休憩をし、少し仕事をして、夕方には帰ります。帰りには、毎日寄り道をし、友達と買い物に行ったり、お酒を飲みに行ったりします。家に帰るとお風呂に入り、ゆっくりとくつろいでから寝ます。時々、仕事のことも考えずに、夜更かしをすることもあります。このような生活を月曜日から金曜日まで続けます。 土日のお休みの日は、友達と買い物に行ったり、遊びに行ったりする日もあれば、家で音楽を聴いたりテレビを見たりして、ゆっくりと過ごす日もあります。お休みの日に、仕事のことを考えたりはしません。
質問内容	① この話についての感想 ② 遊んでばかりで給料がもらえなくなったらどう思いますか

聞き取り調査内容を表2に示した。

いける土台になると考えたからである。労働と余暇のたとえ話の内容および質問内容を表3に示した。

5. 労働と余暇のたとえ話

労働と余暇の関係の捉え方が、余暇の過ごし方に影響を与えるのではないかと考え、具体的な事例をあげて意見を聞く課題を行った。労働を過度に重視していると、休日でも自ら進んで仕事を入れたり、家庭でもゆったりと過ごす事ができなかつたりするであろうし、また逆に余暇を過度に重視していると、休日に仕事を無視した過ごし方になり、仕事に影響が出たりすると思った。労働と余暇を同等に考えることができれば、労働と余暇をバランス良く広げて

発 達 検 査

新版 K 式発達検査 2001 における、対象者の領域ごとおよび全領域の発達検査結果は以下の通りとなった (表4)。表4に示したように、認知・適応領域は6歳6カ月から10歳4カ月で、平均8歳4カ月であった。また、言語・社会領域は7歳3カ月から9歳4カ月で平均8歳5カ月、全領域は7歳8カ月から9歳11カ月

表4 発達検査の領域別結果

	年齢・性別	認知・適応	言語・社会	全領域
A	(59歳 男)	8歳5カ月	7歳3カ月	7歳9カ月
B	(34歳 男)	6歳9カ月	8歳2カ月	7歳8カ月
C	(30歳 男)	8歳5カ月	8歳6カ月	8歳6カ月
D	(23歳 女)	9歳9カ月	8歳6カ月	8歳11カ月
E	(37歳 男)	6歳6カ月	8歳9カ月	7歳9カ月
F	(43歳 男)	10歳4カ月	9歳4カ月	9歳11カ月

で平均8歳5カ月となった。

認知・適応領域、言語・社会領域、全領域の平均値の差は1ヶ月以内と、大きな差が見られなかった。認知・適応領域—言語・社会領域間のずれの平均値が1歳4カ月で、高い値を示す領域は、各人によって異なっていた。

聴き取り調査

「労働」「暮らし」「余暇」を区別して考え、それらを意識することができる軽度知的障害者に対し、それらの実態や意識を明らかにするために、聴き取り調査を行った。他の調査研究の多くが、生活実態に焦点を当てたものであったため、本調査では実態と共に特に本人の意識を問うことに主眼を置いた。そして、筆者が現在知的障害者のグループホームで支援員をしていることから、そこで実際に関わった事柄についても結果として取り上げていくこととした。

1. 聴き取り調査結果

以下に、対象者の余暇の実態と要求についてまとめた(表5～表10)。

2. 余暇の現状と課題

余暇の現状としては、1人で過ごす余暇が多く、寝る、買い物、TVやゲーム、パチンコなどが多い。この結果は、先行研究の余暇の実態調査結果とほぼ一致していると言える。どの対象者も週5日で働いており、「休日くらいはゆっくりしたい」という理由で、1人で過ごしたり、寝て過ごしたりすることもあるだろう。しかし、その理由に加え、「仕方なく」寝る、1人で過ごすということもあると考えられる。全体的に、Dの水泳のような主体的な活動は少なく、余暇内容に対して質的に疑問を感じる部分もある。自分が文化の発信者になるというよりは、受け身的な余暇であると言えるのではないだろうか。パチンコやゲームなど、特定の余暇に固執している部分もあるが、本人たちは、今まで経験したことを基に、自分なりに余暇を作りだしているとも言える。狭い経験や偏った経験しかないという制約がありつつも、そこから自身が楽しいと思える内容を選び取り、余暇を上げていくことができるのである。

そして、それぞれが自分のねがいを持っていたとしても、ホームの決まりや経験の狭さから、新た

表5 Aの余暇の実態と要求

○現在の余暇の過ごし方	
・仕事後	・寄り道(コンビニ) ・車内で缶ビールを飲む
・休日	・映画、ボーリング ・ホームの行事 ・作業所祭り ・朝市 ・ツアーの日帰り旅行や1泊旅行(父のまねをした)
○仕事帰りで楽しい時	・帰ってきて自分の好きなメニューだった時 ・テレビ雑誌を読んでいる時
○休みの日で楽しい時	・レコードを聴いている時 ・ビデオやDVD鑑賞
○仕事帰りに他にしたい事	・なし
○休みの日に他にしたい事	・日光東照宮に行く ・コンビニでバイト(お金が稼ぎたい) ・ハイキングや山登り(歩こう会の経験、広報)
○行事への要求、思い	・スケート(クラブに入っていたことがある) ・一泊旅行(みんなで積み立て)
○ホームでしてほしいこと	・なし ・なし

表6 Bの余暇の実態と要求

○現在の余暇の過ごし方	
・仕事後	<ul style="list-style-type: none"> ・DVDを借りる ・ファストフード店に立ち寄る ・コンビニに立ち寄り、飲み物、お菓子、パンを購入する
・休日	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどGHにいる（以前居たショートステイよりゆっくりできる） ・映画鑑賞に行く ・日帰りや宿泊旅行（作業所の仲間2、3人と） ・土曜開所の日には作業所の仲間の家に行って喋る、カラオケ（男女7人くらいで） ・作業所での行事（土曜開所日） <ul style="list-style-type: none"> →工場見学、ドライブで各自買い物が多い。 花見、合宿、キャンプ、作業所でのご飯づくり、地元の祭への出店 スポーツは少ないがある。 ・居住市の障害者の集まり（以前は） ・ホームの企画
○仕事帰りで楽しい時	<ul style="list-style-type: none"> ・本屋に立ち寄る時 ・小説を読む時
○休みの日で楽しい時	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とわいわいしている時
○仕事帰りに他にしたい事	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事仲間とご飯を食べに行きたい（GHの食事があるからできない） ・1人で遊びに行きたい（大勢での動きに疲れたから）
○休みの日に他にしたい事	<ul style="list-style-type: none"> ・実家の部屋の掃除（近日中） ・お菓子作り ・姪っ子に会いに行く（兄の休みが不定期で行きにくい） ・いとこに会う ・遠出しなくて良いから、近場で落ち着ける人に会いたい
○行事への要求、思い	<ul style="list-style-type: none"> ・作業所での企画について、実費では、行きたくても行けないことがある 工場見学のような、勉強ではなく、ストレス解消的な企画が良い（カラオケ、スポーツなど、周囲に気を使わず、地を出せるもの） 気を許せる仲間、何でも言える仲間がいてほしい
○ホームでしてほしいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・お菓子作り・ショートステイでしていたことをしたい。 ・キーパーを含め、GH仲間全員で話がしたい。 ・キーパーに悩みごとなどについても話をしたい。

表7 Cの余暇の実態と要求

○現在の余暇の過ごし方	
・仕事後	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーやアミューズメント施設にゲームの通信をしに行く ・スーパーにうどんやどら焼きを買いに行く ・パチンコ ・実家に帰って料理 ・弟と映画鑑賞に行く
・休日	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科に通院 ・部屋でゲーム ・100円均一で買い物 ・いずれも1人で ・社会福祉協議会主催の交流会
○仕事帰りで楽しい時	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム
○休みの日で楽しい時	<ul style="list-style-type: none"> ・実家で料理
○仕事帰りに他にしたい事	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強（漢字、数学、地理、歴史）
○休みの日に他にしたい事	
○行事への要求、思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームでは、カラオケ、ボーリング企画をしてほしい
○ホームでしてほしいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・貯蓄して、GHメンバーで旅行。 ・たまには外食したい。 ・弁当を持参して紅葉や桜を見に行きたい。 ・遊園地 <ul style="list-style-type: none"> →姫路セントラルパーク（みんなで乗り物に乗って楽しめるから良い。） USJ（アトラクションばかりで、乗り物に乗ってみんなで楽しめないからダメ。）

表8 Dの余暇の実態と要求

○現在の余暇の過ごし方	
・仕事後	・すぐに帰宅する
・休日	・水泳 ・GHメンバーと昼食を買いに行く ・水泳の本を買って泳法の研究 ・ホームの企画 ・作業所の旅行や歓迎会
○仕事帰りで楽しい時	・仕事仲間と話している時
○休みの日で楽しい時	・水泳、筋力トレーニング
○仕事帰りに他にしたい事	・スーパーに行ってキャラクターを見たい ・水泳
○休みの日に他にしたい事	・今は水泳以外にしたい事はない
○行事への要求, 思い	・お風呂に入る企画（ただし、障害の重い人を除いて）
○ホームでしてほしいこと	・特定のキーパーに洗った食器を拭いてほしい

表9 Eの余暇の実態と要求

○現在の余暇の過ごし方	
・仕事後	・お酒, たばこ
・休日	・自転車で買い物, うろろう（1人で） ・GHの企画に参加
○仕事帰りで楽しい時	・お酒を飲んで自転車に乗っている時
○休みの日で楽しい時	・映画館のように室内を暗くしてDVD鑑賞
○仕事帰りに他にしたい事	なし
○休みの日に他にしたい事	・車に乗る
○行事への要求, 思い	・日帰り旅行に行きたい。 （人によっては金銭的に厳しいから、職員に言いだせない） → H22年3月 日帰り旅行あり
○ホームでしてほしいこと	・カラオケがしたい。 ・職員と利用者という関係を取っ払って食事会。

表10 Fの余暇の実態と要求

○現在の余暇の過ごし方	
・仕事後	・夕飯作り
・休日	・彼女とデート ・彼女の家に行く ・ゲームセンター
○仕事帰りで楽しい時	・なし
○休みの日で楽しい時	・彼女とデートしている時
○仕事帰りに他にしたい事	・お金があったらどこか行きたい。
○休みの日に他にしたい事	・旅行（温泉, USJ, Disney Land）
○行事への要求, 思い	・全員が集まる企画には行きたい（H22.3月 全員での日帰り旅行参加） ・日程的に行けない人を対象とした企画を行ってほしい →現在は、仕事が変わったため日程に問題なし
○ホームでしてほしいこと	・設備の修繕 ・キーパーの増員

な一歩を踏み出していけないということもある。軽度の知的障害者は基本的に、経験を基に少しずつ世界を広げていくため、経験が少ないと独力だけでは世界を広げづらい。それゆえ、新たな一歩を踏み出すための土台となる経験が少な

く、「～したい」というねがいを持っていたとしても、独力では実現できないでいる。また、「旅行に行きたい」「映画を見に行きたい」といった、余暇を広げていくようなねがいを持っているにもかかわらず、金銭的な制約でそれらが叶えら

れないという現状もある。特に、作業所就労をしている場合は月額数万円の給与であり、障害基礎年金はグループホームの利用料などで相殺され、実質自由に使えるお金は作業所の給与である数万円である。ここから、休日の昼食や生活用品も購入しなければならないため、余暇に費やせる金額はほんの僅かである。作業所の給与や障害基礎年金の少なさは、障害者に対する絶対的な社会保障額の少なさがある。豊かな余暇を作り上げていくにあたり、先述したような本人の発達のな制約や経験の制約だけではなく、社会的な要因も影響しているのである。

労働と余暇の捉え方

適宜具体的な絵を見せながら、先述した表2に示した内容を対象者に話した。その後、表2に示した質問を行った。

1. 労働と余暇の捉え方についての結果

各対象者の労働と余暇の捉え方についてのたとえ話に対する感想と特徴を以下表11にまとめた。

2. 労働と余暇の捉え方についての考察

たとえ話に出てくるそれぞれの生活を評価する際、社会的、一般的な基準ではなく自分の基準を持ち込んで評価していることが多い。自分の職場での休憩時間や休憩の形態に照らし合わせながら考えたりしている。これらは知的障害による、社会的視点で物事を見ることの困難さの表れとも言えるが、自身の経験が物事を判断する基準として蓄積されていくのも、軽度の知的障害者であるからだと考えられる。また、「自己責任」「自業自得」「ノイローゼ」など、本人がどれくらい実感を持って使用しているかは不明だが、借り物のような言葉も多く発言されている。言葉に表される表現と、認識にギャップがあり、言葉の表現からのみでは本人の認識を捉えることに限界がある。

また、生活全般を捉えた発言よりも、部分的にピックアップして発言していることが多い。生活全体を捉えた上で、余暇と労働の関係性を捉えていくことは少し難しいと考えられる。た

だ、発達段階が上がるにつれ、少しずつ捉えられる範囲が広がっているようである。労働の一部分を抜き出して評価する段階から、「働き方」として労働全体を捉えるようになり、最終的にはFの発言から分かるように、生活ぶり全体に目を向けることができるようになっている。

しかし、部分的な捉え方であっても、自分なりの軸があり、それを基に他者の労働や余暇を評価していくことはできる。ただ、それを自分にも当てはめ、自身の生活全体を振り返ることや、自身の生活と対比的に捉えることが難しいようであった。そのようなことが可能になるには、発達の的に9~10歳頃に獲得する自己客観視の力が必要であると考えられる。

総合考察

労働と余暇、暮らしは互いに影響し合っており、決して3つの場が独立したものではない。その中でも、特に余暇と労働は互いに密接な関係にあり、余暇と労働のバランスによって、生活全体が左右される。

余暇生活が充実するよう支援する時、余暇が労働と互いに影響し合っている以上、余暇だけの実態を見て支援してもなかなか充実していかないのである。余暇の充実をねがう時、労働や暮らし、余暇全体に目を向け、3つの場がどのような関係にあるのかをきちんととらえる必要がある。特に労働と余暇については、能力や価値観、体力や年齢などによって、1人ひとりの生活が安定する最適なバランスがある。しかし、発達の的に、労働と余暇のバランスを捉え、少しずつ調整していくことが難しいため、通所拒否や退職といった極端な行動につながるが多いようであった。それは、将来の見通しの持ちづらさとの関係もあると考えられる。そういった意味では、本人だけに労働や余暇のバランスを調整させることを強いるのではなく、支援者が「労働をとおした自己実現と余暇活動をとおした自己実現が最適な条件で止揚関係」になるよう、ある程度調整していく必要があるのではないだろうか。

表11 労働と余暇の捉え方についての結果

	各対象者の感想	特徴
A	①「昼間はまじめに仕事をしていて、短い休憩で、また真面目に仕事をして、帰ってご飯を食べるんやね。」 「昼の休憩が短くてかわいそう。」 「休日は何も考えなくて良い。」	示されている状況に疑問を持ち、その状況を打開するための考えを持つことが難しく、それぞれの状況下での対処法を述べるにとどまる。しかし、「昼の休憩が短くてかわいそう。」など、自分の休憩時間を想定しながら、短い休憩時間に対して、「かわいそう。」と、感情移入して考えることができる。状況に対して、評価をするにとどまる。
	病気：「職場に電話して休ませて下さいと言います。その後に、診断を受けてそれを会社に伝えないといけないです。採血も必要やね。」	
	②「仕事はまじめやね。」 「休憩は1時間が普通やね。僕もそうやし。」 「毎週飲みに行くのはだめで、年に1回くらいなら良いと思う。僕もそうやし。」	
	お金：「良くないけれど、休ませて下さいと言えば問題ない。1カ月の生活も困ってしまうし、働かないと給料がもらえない。」	
B	①「体を壊してしまし、付き合いをしなかったら友達ができないし寂しい。」 「唯一友達くらいはいた方が良い。」 「休憩を取らないとリズムが崩れる。」	示されている状況に疑問を持ち、その状況を打開するための考えを持つことができる。また、話の中になくても、「休憩を取らないとリズムが崩れる」などと今後起こりうる状況にも目を向けることができる。しかし、自身も仕事を頑張るすぎててんかん発作が頻発したり、「毎日寄り道ばかりしてはお金がなくなる。」と言いつつも、寄り道ばかりして何度も小遣いが底をついているのだが、あまり自分と結び付いていなさそうであった。
	②「普通の働き方で、普通の社会人の過ごし方。」 「(仕事より遊びを優先することに關しては) 仕事の時は仕事、休みの時は休みと区別するべき。」 「毎日寄り道ばかりしてはお金がなくなる。」	
	病気：「生活できないし、社会人失格。」	
	お金：「生活できないし、社会人失格。」	
C	①「こんな働き方は体に良くないし、体を壊したら仕事ができひん。休憩しなあかん。」 「体を休める意味でも、休みの日は仕事を切り離してどこかに行かないとあかん。」 「病気になるっては洒落にならんし。体は資本やし。」	示されている状況に疑問を持ち、その状況を打開するための考えを持つことができる。また、話の中になくても、「病気になるっては洒落にならんし。」などと、今後起こりうる状況にも目を向けることができる。ここで話していることと、生活がかけ離れているということはありません。
	②「仕事中はもう少し仕事のことを考えるべきやろ。こんなやつたら、会社に遊びに行ってるようなもんやで、手を抜きすぎや。」 「休みの日の過ごし方は良いと思う。」	
	病気：「自己責任やし、自業自得やわ。」	
	お金：「自業自得で、遊びも仕事もほどほどにしまあかんやろ。」	
D	①「働きすぎやし、過労死するわ。」 「休憩した方が良い。」	示されている状況に疑問を持ち、その状況を打開するための考えを持つことができる。また、話の中になくても、「過労死するわ。」などと、今後起こりうる状況にも目を向けることができる。この話を聞いて、改めてそこで自身の状況を話すことができる。
	病気：「充実していると思う。〇〇(作業所名)でもおやつあるし、それと一緒にだから」 「自分は寄り道しないけれど、他の仲間は寄り道しているのは良いと思う」	
	②「充実していると思う。〇〇(作業所名)でもおやつあるし、それと一緒にだから」 「自分は寄り道しないけれど、他の仲間は寄り道しているのは良いと思う」	
	お金：「自分自身のことを考えるべき。私は朝早いから夜早く寝るように心がけてるし。」	
	仕事中に休みのことを考えている—「私も金曜日は考える。」	
E	①「体を壊すし、ノイローゼになる。」 「この様な働き方は無理やし、集中は2時間が限度。」	示されている状況に疑問を持ち、話の中になくても、「ノイローゼになるわ。」などと、今後起こりうる状況にも目を向けることができる。しかし、「体を壊すし、ノイローゼになるわ。」と言いつつも、こちらが「病気になるたらどうする？」と尋ねると、「生きた証であり本望。」と矛盾した回答をする。また、本人も休日の日にも仕事を入れており、感想と現状がやや矛盾していると言える。
	病気：「生きた証であり本望。」	
	②「怠け者で、仕事の姿勢が見えない。飲みに行つてばかりでは、メタボ、痛風、糖尿になる。」	
	お金：「心を入れ替え、所長と話をしして謝る。」	
F	①「こんな生活は面白くない。趣味を持つべき。」 「このような生活では友達ができない。」 「休みの日に仕事ばかり考えるのは良くないし、彼女も嫌だろう。」 「自分はこのような働き方はしたくない。」 「このような人が周囲にいたら面白くない。」 「働き方はめちゃくちゃで、10~20分くらいは休憩すべき。」	示されている状況に疑問を持ち、その状況を打開するための考えを持つことができる。また、話の中になくても、「このような生活では友達ができない。」などと、今後起こりうる状況にも目を向けることができる。また、話の一部分だけではなく、労働と余暇を合わせて「生活」と捉え、それを自分に置き換えて意見を述べるができる。どちらかと言うと、余暇を重視している発言が多く、実際の生活でも土日の休みを所長に嘆願して確保しており、発言と行動に一致が見られる。
	②「理想的で普通の働き方。」 「自分自身も休みの日に仕事のことを考えない。」 「遊ぶ時は遊ぶ、仕事の時は仕事、休憩のときは休憩すべき。」 「仕事の時に休みのことばかり考えるのも問題ない。」	
	病気：「心を入れ替え、所長と話をしして謝る。」	
	お金：「心を入れ替え、所長と話をしして謝る。」	

引用文献

- 1) 小林繁. (1995). 君と同じ街に生きて 障害をもつ市民の生涯学習・ボランティア・学校週5日制. れんが書房新社
- 2) 郷間英世, 藤川聡, 所久雄. (2007). 知的障害者の余暇活動についての調査研究 — 通所授産施設に就労している人を中心に —. 奈良教育大学紀要, 人文・社会科学 56 (1). p. 67-p. 70
- 3) 武蔵博文, 水内豊和. (2009). 知的障害者の地域生活と余暇活用に関する調査研究. 富山大学人間発達科学部紀要 第3巻第2号. p. 55-p. 61
- 4) 余暇開発センター『レジャー白書 '92』
- 5) 宮本文雄, 大野由三. (1996). 知的障害者(養護学校卒業生)の余暇活動に関する研究 — 年齢の要因からの分析を通して —. 東京成徳大学研究紀要 第3号. p. 163-p. 176
- 6) 渡邊洋一. (2000). 知的障害者への余暇支援に関する考察. 淑徳大学社会学部研究紀要 第34号. p. 44-p. 55

参考文献

- ・一番ヶ瀬康子, 藺田碩哉編. (2002). 実践・福祉文化シリーズ 第5巻 余暇と遊びの福祉文化. 明石書店
- ・加藤直樹. (1987). 少年期の壁をこえる — 九, 十歳の節を大切に —. 新日本出版社
- ・白石恵理子. (2000). 一人ひとりが人生の主人公 青年・成人期の発達保障. 全障研出版部
- ・全国グループホームスタッフ・ネットワーク編. (2008). 障害者グループホームスタッフハンドブック きほんのき《改訂増補版》. 全国グループホームスタッフ・ネットワーク
- ・田中昌人. (1987). 青年・成人期の発達をどうとらえるか. 生活と人格発達. 人間発達研究所編. 全障研出版部. p. 233
- ・丸山啓史. (2004). 重度知的障害者の余暇保障に関する一考察. 生涯学習・社会教育研究 第29号. p. 63-p. 71